

もできないが、せめてあの人たちの上に少しでも幸せがくるように祈らずにはおれない。

私の体験など、苦難というにはあまりに序の口に思えるけれど、伝えたいと思う過去はたくさんある。無念のうちに果てた多くの人たちへの鎮魂の思いを込めながら、少しでも語り継ぐよすがとなればと思いつながら、書き綴りました。

私の引揚げ体験記

石川県 辻 美代子

私は、大正五（一九一六）年七月十一日に、当時の石川県江沼郡山代町（現在の加賀市山代）で生まれ、九人の兄妹姉弟の三女として育ちました。家は代々持ち山も少々ある材木屋で、父は樵きこりと一緒に毎日山に出掛けていました。

仕事熱心な父と、家事と育児を一手に切り盛りして、多忙ながら教育熱心な母、それに仲の良い兄妹姉弟に囲まれて、貧乏ながらそれ相応の平和な生活で過ごしていました。特に母は、学校での教育参観日には、多忙な家事の中を時間をつくって、必ず子供たちの授業を見に来ていました。

姉二人は女学校に進学しましたが、私は妹や弟の世話をするために、女学校に行くことはあきらめて、和裁の勉強をしながら家事を手伝っていました。家で消費する漬物や梅干などは、全部私が

作っていましたので、後に家庭を持ってからも大変に助かり、家事手伝いをしていたことを良かったと思っています。

上の姉は十七歳になってすぐに近くの家に嫁ぎました。その子供、私にとっては姪が毎日我が家に遊びに来るので、妹や弟の分とその姪の分まで、オムツなどの洗濯をしていました。母は私の苦勞を察して、私の機嫌を損ねないようにいつも褒めてくれました。

昭和十(一九三五)年、十九歳になったときに、近所の方が私の縁談話を持って来られました。日ごろから、私は心の中ではどこか遠い所に行きたいと思っていました。何と、縁談の相手というのは近くの農家の長男でした。しかし、話を聞くとか訳があつて、満州に行っているらしいのです。満州と聞いて随分遠くだと思いがら、何を調べるといふことでもなく、ふらふらと下の姉に伴われて二人でその家を訪ねました。もちろん本人は不在であることは承知していましたが、いろ

いろと話を聞いて、そのまま本人不在の中で親子固めの杯を取り交わして、一晩泊めてもらい、結婚の約束をして家に戻りました。一緒に行動した姉は、心配のあまり一晩中涙が流れて止まらなかつたそうです。

それからの話ほとんどん拍子に進み、七月には準備を整えて満州に出発することになりました。主人となる人は既に満州にいるので、私一人で見も知らぬ所に向かうのです。母は家を空けることができなないので、祖母が現地まで送ってくれることになりました。家を出るとき、一番末の妹が泣いて泣いて私から離れませんでした。生まれたときから私が面倒をみていたので、母親のつもりのようななつていて、私も一緒に泣いてしまいました。「なんで最愛の家族と離れて、遠い満州くんだりまで行かなければならないのか？」と後悔気味の気持ちになつたのも事実です。

多くの人々によって、盛大に見送られて出発しました。途中から主人になる人の弟とも一緒にな

り、門司に向かいました。汽車に乗っての初めての長旅でしたが、先行きの不安な気持ちで頭の中で渦を巻いていて、途中のことは何一つ覚えていません。ただ、門司港から大きな船に乗ったことと、それがひどく揺れて船室の畳の上をごろごろと転がり、気持ちが悪くなって吐いたことは鮮明に覚えています。

船は大連港に着きました。大連港は、大きくて立派な港であったことが強く印象に残っています。そこまでどれくらいの間がかかったのかも、記憶にありません。

大連港には主人が迎えに来ていました。ここで初めて主人となる人と顔を合わせたのですが、私はただ頭を下げてばかりいて、まともに主人となる人の顔を見ることができませんでした。

大連で休むこともなく、すぐに大連駅から汽車で普蘭店に向かいました。普蘭店が主人のいる所で、これからここで生活することとなるのでした。私たちの新居となる家は煉瓦造りの小さな家

で、部屋は二つだけでした。台所には大きな瓶が置いてあって、毎日新しい水を入れていました。

水を汲むのはお手伝いさんに頼みました。家に入った翌日には近所の挨拶回りをして、その後は祖母と二人で大連市内や近くの旅順市内の見学をして過ごしました。ここで、初めて主人の仕事を知りました。主人は警察官で、普蘭店の警察署で鉄道列車の出入を監視する仕事をしていました。当時は一般的な農家の長男は、その実家を継ぐのが当然でしたが、徴兵検査に合格して金沢の連隊に入隊した主人は、除隊の際に馬一頭をもらって家に戻ったそうです。それからはその馬で田畑を耕し、村の青年団長となって活躍していました。そのころに親同士で決めた人と結婚しましたが、そのお嫁さんは半年後に病気になるって亡くなったとのことでした。それから、いろいろな人が嫁取りの話や次から次と持ち込んで来るのに、嫌気がさしていたそうです。ちょうどそのころ、新聞で警察官募集の記事を見つけたので、それから採用試験

を受けるために、昼は普通に働き、夜は縁側でランプの下で一生涯懸命に勉強したとのことです。試験の当日は、両親には金沢に遊びに行ってくると言って家を出て、警察官採用試験を受けたそうです。その結果、見事に合格したのですが、両親にそのことを知らせるのを躊躇して、祖母にだけ事情を話して、トランク一つだけを持って神戸に行きました。神戸港から船に乗ろうとしているところに、驚いて後を追ってきた父親に会い、「帰ってくれ！」と泣いて翻意を促す父親をそのままにして乗船し、別れたとのこと。

大連の警察署で訓練を受けていましたが、しばらくして気持ちも落ち着いたころから、たびたび父親に手紙を出していたそうです。しかし、父親からの返事には、いつも嫁取りの話が書いてあったそうです。

大連で約一年が過ぎたころに、また話がありました。今度はいつまでも両親に心配を掛けることもならないと考えて、決心をして一時郷里に帰

りました。しかし、家に着くと、その相手の人は病気になっていて、大連に連れて行くことが困難な状態で、その話はそのまま解消してしまったとのことです。

このように、いろいろないきさつがあったあとに、私との話があったとのことでした。そのためだけとは思いませんが、主人は私をとっても大事にしてくれました。

休日には、地平線まで何も遮るものがなく見渡せる大草原を歩いたり、ときには普蘭店の市街に行っても、商店街などの人混みの所は買い物以外は極力避けて、神社やアカシヤの並木通りなどを歩いて、新鮮な空気に接していました。冬は寒いので、病気になることを心配していると気を使ってくれました。

当時、本署は瓦房店という所になりましたが、そこには立派な病院や学校があつて、近代的な立派な街でした。普蘭店の官舎での平穏な新婚生活が、一年以上も続きました。その後、主人は関東

局勤務を希望して、大連市の黒石町にある官舎に移転しました。官舎は何軒も並んで建っていました。風呂は共有だったので、冬期には随分と苦勞しました。昭和十二年九月には、その官舎で長男が生まれました。

この官舎街も住み良かったのですが、ただ一つ油断できないことがあり、大変に困ったものでした。それは、官舎街を大きな籠を背負って、くずやごみをあさって歩く満人が多くいて、少し気をゆるすと棒の先に針金を曲げたような物をくくりつけて、引っ掛けられるような道具を持っていて、それで台所に置いてあるバケツや鍋・釜や、玄関前に干している子供の運動靴などを引っ掛けては、籠の中に入れてそのまま立ち去るのです。ひどいのは、二階のベランダに干した洗濯物も、同じように引っ掛けて持って行ってしまいました。洗濯物は竿に通して干しているのですが、いつ取って行くのか物音も立てずに、本当に巧妙でした。怒るといふよりも、感心させられていま

した。

昭和十四年三月には次男も生まれ、我が家も子ども二人の四人家族となり、賑やかで平和な家庭となりました。次男の出産には、実家から上の妹が手伝いに来てくれました。この年の四月には、主人は部長に昇進して甘井子署に転任となり、私たち家族も一緒に新天地に移りました。今度の官舎は淑房^{シユクボウ}屯^トという所でした。そこが満州で平和に過ごした最後の地になるとは、夢にも考えられないことでした。

昭和十六年には長女が、そして昭和十八年には次女が生まれ、六人家族の大世帯となりましたが、子供たちは皆元気にすくすくと育っていて、他からも羨ましがられるほどの平和な日々でした。

しかし、その平和も昭和十九年になると、日常の生活を通して、何となく変化をきたしていました。特に、治安が悪くなったというような気持ちになることがありました。翌年になると、世間の空気が日に日に険悪になってきました。春には、

官舎の人たちと共同で裏山に大きな防空壕を掘りました。そのころ私はお腹に赤子を宿していて、この防空壕の中で出産するつもりで覚悟をし、いろいろと準備をしていました。

八月十五日、薄々感じてはいましたが、ついに終戦を迎えました。しかし私は出産のことばかりが頭にあつて、「日本が戦争に負けた！ 外地にいる私たちはどうなるのか？」というようなショックも、あまり感じないままに過ごしていました。出産を間近に控えて、主人は手伝いの休暇を取るために、休暇願を持って署に行つたまま帰つて来ませんでした。敗戦によるショックという事で、もなかつたのですが、予定よりも早く産気付いて、官舎の年輩の奥さんたちに手伝つてもらい、防空壕の中で無事に女の子（三女）を産むことができました。

慌ただしい日を過ごしているうちに、ここにもソ連軍が進駐して来ました。進駐してきたソ連兵は四人部隊ということで、進駐して早々から女を

探し求めていました。官舎でも、子供のない若い婦人たちは、早々と黒髪を思い切りよく切つて丸坊主になり、男物の服を着るようになりました。赤ん坊を抱いた人には手出しをしないということがうわさで伝わつてきましたので、どうしても外出しなければならぬときには、自分の子供を連れて行くか、よそ様の赤ちゃんを借りて背負つて出掛けるようになりました。それでもソ連兵をだますことは難しく、子供を背負つたまま追い回されている女の人や、二階のベランダまで追い詰められて、あわや飛び降りる寸前の人を窓から見たことも何回かありました。

それでも最初のころは、ソ連兵も恐る恐る手出しをしていましたが、そのうちにだんだんと野獣化してきて、荒々しい行動をするようになりました。そのうちに地元の中国人が、勝手知ったところとばかりにソ連兵の手先となつて、数人のグループを案内して先頭に立つてやつて来て、鍵の掛けてある戸をこじ開け、土足のまま侵入するよう

なつてきました。彼らは、まず目についた貴重品、特に腕時計や万年筆、それに着物や帯や派手な色の襦袢などを見付けると、嬉々として奇声をあげて、我先にと奪い合つて強奪していききました。欲しい物が無いと、次々に女の体を要求してくるので、それをかわすために箆筒の中や鏡台の小引出しの中や、本箱の引出しに分散して隠しているようなかっこうで入れておきました。ソ連兵の中には、拳銃や日本刀はないかと家中を探し回る兵隊もいました。

私は、生まれたばかりの三女を抱きかかえて、官舎街の中をあつちこつちと逃げ回つたものです。官舎は警察関係者の宿舎だったので、余計にソ連軍や中国人たちにならまれていたようで、私たちももうこの官舎に住まうことは危険と思ひ、あきらめて市内にある友人の会社の社宅に毛布一枚を持って、幼い子供五人を引き連れ避難しました。どのようにしてその家にたどり着いたのか、それこそ無我夢中だったのでしようか、今でもその当

時の記憶は全く思い出せません。その夜はすっかり安心して、子供を抱えて寝ただけは記憶に残っています。

そのときは、無事に逃げることだけに一生懸命でしたので、翌朝になって何も食べるものがないことに気付き、子供を預けて一人で官舎に戻りました。戻つてみてびっくりしたことは、既に我が家は窓という窓のガラスは全部割られ、扉という扉は全部壊されていたことです。ようやくのことで中に入りましたが、食べ物は何も略奪されていなくて、何も残っていませんでした。食料品は、ソ連兵ではなく、先頭に立つてやつて来た中国人が持つて行ったものと思ひました。結局は何も持つて戻ることができず、友人の家でしばらくお世話になることにしました。

数日はそのような生活をしていましたが、これ以上の迷惑をかけることもできないので、再び官舎に戻りました。しかし、ソ連兵の行動は相変わらずで、不意に入つてくるので安心して生活はで

きずに、ちよつとした物音でもぎよつとして、神經が凍りつくような日を過ごしていました。

ある日のこと、例のとおり官舎の中にソ連兵が入って来たのを知り、五人の子供を引き連れて、近くの消防署の火の見櫓に逃げることにしました。その火の見櫓には、高い所にちよつとした小屋のようなものがありました。これは以前から逃げ場を考えていたので、すぐに実行したのですが、そこに入って中から鍵を掛けて、息を殺していました。そのうちにソ連兵が登って来て、入口の戸をどんどんとたたき、「開けろ！ 開けろ！」というようなことを大声を出して言っていました。その声を震えながら聞き、必死になって戸を押さえていました。子供たちにも、決して声を立てては駄目よ、と目配りをしていました。もしも、この戸が破られて中に入って来たら、屋上まで上って行って、そこから飛び下りる覚悟をしていました。もちろん、五人の子供と一緒にです。そのうちに、あきらめたのでしょうか、静かになったので、ほ

つとして気を失いかけました。いつまでもその櫓の小屋にいることもならず、夜になって官舎に戻りましたが、それからしばらくは何事も起きませんでした。

八月十五日からの毎日は、恐怖と混乱で頭の中がぼーとしたままに過ぎていったようで、毎日のことはあまり覚えがありません。

ある日、見知らぬ二人連れの男の人が、私を尋ねて来ました。最初は、事情もよく分からないので半信半疑で応対をしていましたが、「貴女のご主人から頼まれたのだ！」と言って、マツチ箱の裏に住所を書いたものを見せられました。その筆跡は、間違いなく主人のものでした。主人からの言づては、この家に移るということでした。私は、主人が無事に生きているという嬉しさが先に立って、有頂天になってしまいました。二人の男の人も急に頼もしく思い、それからは打ち解けて話を始めました。何日も風呂に入っていないというので、早速に風呂を沸かして入ってもらい、

主人の下着を差し出して着てもらいました。

そのころには、元気な人はリュックサックに荷物をいっぱい詰め込んで、比較的にな安全な大連市内に運んでいましたので、私もその男の人に頼んで荷物を少しづつ運んでもらうこととし、主人が連絡をしてきた家に運び込みました。そこは、元は倉庫だったのですが、窓ガラスは全部割られ、畳は上敷の部分にはがさがされて、床わらがむき出しになっていました。入口の戸も壊れたままで、十一月の寒い風が容赦なく吹き込んでいます。

荷物もほとんど運び終えたので、主人が戻ってくるまでは頑張らないと、と覚悟をして、五人の子供と毛布にくるまって過ごすこととなりました。幼い五人の子供たちがいるので、洗濯物が多く大変でした。凍りつくような井戸水ですので、洗った片っ端からばんばんに凍っていくので、干すのもひと苦労です。また、毎日の食べることに苦勞しました。残り少なくなった主人の洋服など

を、一枚一枚と売っては、わずかばかりの現金を握って、その日の飢えをしのいでいました。

市内では、いろいろとデマが乱れ飛んでいました。北満からの避難民が、ここ大連を目指してどんどんと南下しているということも、大きく伝わってきました。どうしたことか、二人の男の人はそれを聞いて「おれたちも出て行く！」と言い出して、本当に何も言わずに出て行ってしまいました。

数日後、主人がこの倉庫を探しあてて戻ってきましたが、一言も口を聞かずに、火の気のないストーブの前で腕組みをしたまま座っていました。その後ろを見ると、本当に哀れな姿でした。主人が、「知人に頼んでお願いしたのに！ こんな粗末な所で生活していたのか？」と言った言葉が最初でした。

主人は、私の出産の看護のため休暇願を持って本署に行き、そこで終戦を迎え、足止めを食ったまま本署で勤務をしていて、そこでソ連軍に捕ら

えられ、シベリア送りになったそうです。列車で送られている途中で、走っている列車から飛び降りて逃げて来たのです。官舎に残した家族のことだけを考えて、少しでも家族が落着いた生活ができるようにと願って、家のことを知人に頼んでいたのです。それが、自分で想像していたのとは全然異なった所だったので、自分自身を責めていたようです。火の気のないストーブの前で、腕組みをしたまま一言もしゃべらなかつた主人の痛々しい姿は、今でも脳裏に焼き付いています。

それから日本に引き揚げるまでの約二年間ほどが、一番惨めな日々となりました。働かなければ日銭も入らず、お金がなければ子供たちに食べさせるものが手に入りません。主人は、十畳ほどの広さのある空き家を探してきて、そこで主にソ連人を相手とした卸の商売を始めました。扱った品物は、ロウソク、油、そしてソ連人の日常の必需品であるウォッカなどの酒類でした。しかし、警察官だったので顔を知られていることもあって、

直接にソ連人の前では商売をせずに、その仕事場に呼び込んで売っていました。家族のために一生懸命に働いてくれました。わずかばかりの儲けの中から、同僚警察官の家族などにも大豆や高粱などを買い求めて、少量ずつでしたが配っていました。

そのころには、大連市内の治安も極端に悪くなってきて、夜間に外出するなどということは到底できませんでした。知人で、夜にもらい風呂に行つて殺された人の死体が、朝になって道路で見付かるという事件もありました。

日本人学校でも、建物などを壊されたり、教室の中の物が勝手に持ち出されたりしていました。長男は、それでも学校に行きたがっていたので、行かせたことがありました。しかし、登校の途中で中国人の子供から「死了好！ 死了好！（死ね！死ね！）」と、野次られながら針金を目の前で回すようなことをされたり、靴やカバンを奪い取ったりするに遭つて、毎日のように泣いて帰

って来ました。そのうちに学校にも行けなくなつたので、タバコ売りでもして少しでも家計を助けてもらおうと思つて、売りに行かせたこともありましたが。しかし、タバコは売れるどころか、売るべき商品を全部奪われてしまうというような始末となり、悔しさと惨めさで、親子で抱き合い泣き通したこともありました。

昭和二十一年の夏ごろになると、ようやく一般在留邦人の引揚げが始まり、そのために引揚者は集団生活をするこゝとなりました。私たちの集団は、大阪町の大きな旅館に集合して、そこで引揚げの順番を待つことになりましたが、その一家に主人となる人がいたり、成人の男子がいる家族は、引揚げも後回しになるといふことでした。一日でも、いや一刻でも早く大連を出発して日本に帰りたいと思う人たちは、お金を出し合つて、密輸船を雇つて出発する計画を立てていました。私たち一家も、密輸船を雇うことで準備を進めていましたが、出航する日の前の晩になつてその計画が漏

れて、主人たち男性が逮捕されてしまいました。特に警察官だったばかりに、主人は逮捕された上に、ひどい仕打ちを受けました。戦争に負けた国の人間として、筆舌に尽くせない屈辱をいやというほどに味わされ、情けなく哀れな思ひでした。この出来事のため、密輸船で引き揚げることをあきらめて、順番を待つことに方針を変えました。

翌年の昭和二十二年三月に、ようやく順番がきました。それから本当に乗船するまでの間は、気持ちの落ち着かない日々を過ごすことになりました。

出発前夜、トラックに寄せられて大連港に連れて行かれましたが、トラックから降りるとすぐに、荷物の検査があり、必要最小限にしぼつて持ってきた衣類や、ここまで何とかして隠して持ってきたお金や貴重品も、全部取り上げられてしまいました。最初の引揚げについての説明では、荷物は子供も含めて一人一個まで携行できる範囲でということでしたので、幼い子供たちにも、私の着物

の帯をほどこいた帯芯で作ったリュックサックに、銘々の下着や着替えの服や、それにお米などの食べ物や詰め込んで背負わせていました。子供たちの服の襟などには、当時の千円札などを縫い込んでいました。主人と私は、着れるだけの物を着込んでいましたので、着膨れして、立ったり座ったりすることが大変でした。しかし、そのように苦心して持って来た物も、全部彼らに取り上げられてしまいました。検査のあった広場には、一銭玉が無数に捨てられていました。最後の最後まで、戦争に敗れた国民の哀れさ、惨めさを体験しました。

私たちの乗船した引揚船は、貨物船でした。主人は、以前に受けた拷問の後遺症で足を悪くしていましたので、歩くことも不自由で、階段を上り下りするたびに、大変な苦勞をしていました。やっと全員の乗船が終わり、引揚船は汽笛を鳴らし、思い出のいっばい詰まった大連港を出航しました。このときの気持ちは何とも言葉に言い表す

ことができず、ただ万感胸に迫ってくるのみでした。昭和十年に、この大連港から夢と希望に満ちあふれて、満州の地に第一歩を印してから十二年。今度は夢も希望もなくして、乞食同然の姿をして大連港を後にすることになるなど、思いもよらないことでした。いろいろな思いが、走馬灯のごとくに頭の中で、浮かんでは消え、消えては浮かぶことを繰り返していました。何のための十二年間だったのかと思うと、嗚咽が込み上げてきて、自然に涙が流れていました。しかし、また反面、現実にはそんな逆境にあっても、五人の子供を一人も失わずに親子七人が揃って日本に帰ることができるといふことは、祖先のお陰と神仏のお助けと、思い、青い穏やかな海に向かって自然と手を合わせてしまいました。

この引揚船に乗っている人々は、大なり小なりそれぞれに不幸を背負っての引揚げであり、その人たちのことを思えば本当によかったと、心の中では喜びでいっぱいになっていました。

船内では雑炊の配給があり、大事に持ってきたアルミの両手鍋に七人分の雑炊を入れて、大事に大事にして船室に運んでいました。もう一つ、アルミの洗面器を持ってきましたが、それは子供五人の便器になっていました。しかしその洗面器だけでは追いつかずに、甲板上に交代で用足しに連れて行きましたが、狭い梯子（タラップ）なので慣れないこともあって、その上り下りは大変な重労働で、それは苦勞したものです。でも、もうすぐ故郷に帰れるのだという希望がありましたので、頑張り通しました。

昭和二十二年三月十八日の朝、ようやく佐世保港内に入り、しばらく待機した後に岸壁に接岸しました。船が岸壁に着いた様子を見ていて、これで無事に故郷加賀に帰れるという思いが、一遍に込み上げてきて嬉し涙が止まりませんでした。子供たちを次々と抱きしめて、「ここが日本だよ！」と教えました。大連港を出航したのが何日だったのか、全然覚えがありませんが、佐世保に着いた

のは三月十八日だったということは、はっきりと記憶しています。だから、何日船に乗っていたのか定かではありませんが、随分と日数が経っていたような気持ちがあります。

ようやくのことで下船となり、日本の土を踏んでも消毒、消毒、そして注射、注射で大変でした。DDT（この名前は後から知りましたが、白い粉の消毒剤でした）と言われた白い粉末を、頭の天辺から爪先まで噴霧器でかけられ、それこそ白ネズミのようになった姿を見て、子供たちは顔を見合わせて笑っていました。子供たちがお腹の底から笑ったのは、これが最初でした。

それから、引揚げに伴ういろいろな手続きをし、これからの生活に必要なお金とか、お米の配給切符などをもらって、解放されました。八歳だった長男に一歳の三女を背負わせて、他の子供は手をつないで、国鉄の佐世保駅までとぼとぼ歩き、佐世保駅からは貨物列車に乗せられて大阪駅に向かいました。貨物列車だったので、子

供五人のお尻の始末が大変でした。今になっても、そんなことだけはよく思い出します。

大阪駅からも次々と乗り換えて、北陸本線の大聖寺駅に着きました。佐世保から電報を打っておいたので、駅には私の妹が出勤時間だったので迎えて出してくれました。妹は、私たちの哀れな姿を見て会社に出勤せずに、私たちを連れて一緒に家に帰ってくれました。すぐに、その足でみんなは主人の実家に向かいましたが、実家では私たちの姿を見て、開口一番、「子供たちが汚い！ 不潔！」と言って、すぐには家の中に入れてもらえずに、庭先で着ているもの全部脱がされそうになったので、私はすぐに子供たちを連れて私の実家に行きました。

農家の長男で両親が「満州などに行ってはくれるな！」と懇願されたのを振り切つて渡満し、戦争に負けたからとは言つても、急に貧しい格好をした家族を引き連れて帰つて来たことは、戸惑いもあつて大変な迷惑であつたことと思ひますが、

そのときは忘れられません。

長男は、実家の校区の小学校に入り通学していました。実家にはしばらくいて、改めて主人の家に行きましたが、ちょうど農繁期だったのですぐに農作業の手伝いに駆り出されました。

しかし、私は大連での生活で悪くした体がまだ回復していない上に、慣れない農作業だったので、八月になって体を悪くして家で静養をしていました。秋になつても少しも良くならないので、金沢の病院に検査入院ということ入院しました。しかし、入院して一カ月が絶つても回復の兆候がなく、もう駄目かもしれないということで、別室に隔離されました。子供たちにも面会に来るようにとのこと、主人が五人を連れて病院に来てくれました。これが最後の面会になるかもしれないと、主人も私も万感胸に迫るものがありました。私の顔があまりにも変わつていたのでしよう。三女は私に近寄ることもせずに、主人に抱きついたまま泣くばかりでした。

その帰り道で、主人は子供たちと一緒に汽車から飛び下りて、一家心中することまで考えたそうです。このことは、後に主人が笑いながら話したことでした。

その後も症状は少しも良くならず、かえって悪い方へと進んでいきました。もちろん、原因も分かりませんでした。主人も、「このままではどうにもならない。一度、家に帰ろう！」と言い出し、死したので、私は「家に帰ったら、私はすぐに死んでしまう！」と言って病院に残りました。

主人とそんなやりとりがあった翌日、若い先生が回診に来て、「どこが痛いのか？」と尋ねられました。私は、本当はお尻の周りに一番の痛みを感じていたのですが、お尻を診てもらうのは恥ずかしくていやだったので、今までも診てもらわなかったのです。体もやせ細ってきて筋肉注射をする場所がなく、仕方なくお尻にするようになったのですが、それが化膿したらしく、四十度を超える熱も出ていました。もちろん、食事も何も咽を通

りませんでした。私も、もう我慢の限界でしたので、若い先生に問われるままに「お尻が痛い！」と言いました。すぐに先生は私のお尻を触り、「あつ！これはひどい。化膿している。すぐに切開だ！」と言って、すぐに手術室に運び込まれました。すぐにメスで患部を切開したところ、膿がどくどくと音を立てて流れました。そのうちに、今までの痛み、苦しさがうそのように無くなってきました。それからは、熱も下がり食欲も出てきました。病室の人たちも、皆驚いていました。それからしばらくして、退院して家に戻りました。主人も、無理な仕事はさせないと言ってくれました。体も回復し、主人が「機織り」の機械を買ってくれましたので、柄紡を織り始めました。紬の反物も織るようになり、家計の助けにしていました。その後、荷造り用のコモを織るようになり、大手の会社に卸すようになりました。農家では、稲の収穫後は大量の藁が出るので、毎日朝早くから夜なべまでして一生懸命に働きました。この仕事の

お陰で、五人の子供はみんな大学まで行かせることができました。

それからのこと、五十四歳で盲腸炎をこじらせて破裂するような大病を患い、五十六歳で子宮ガンになり、五十八歳のときに交通事故に遭いました。そのときは、二十四時間意識不明で、足は複雑骨折の重傷でした。そんな災難が続きましたが、そのつど御先祖様のお助けと、周囲の人々のお力を得て助けられ、今日になりました。生きているというよりか、生かされているという方が適しているかもしれない私の人生です。本当に不思議な思いです。

すべて感謝の気持ちでいっぱいです。主人は、平成三（一九九一）年八月に天国に旅立ちましたが、私は九十歳になった今も元気で、毎日を楽しく暮らしています。

敗戦体験記

岡山県 武田信昭

一 八月十五日のこと

昭和二十（一九四五）年八月十五日。その日の旅順は朝から耐えがたい暑さの中にあつた。枢軸国のドイツ、イタリアは既に連合国に降伏していたし、沖繩も米軍の手に落ち、日本には重苦しい雰囲気が漂っていた。

私はその年の四月、官立旅順高校へ入学したものの、入学と同時に旅順郊外の三間堡にできる新しい海軍飛行場建設のために動員され、兵舎のような所で寝泊りして、モッコを担いでの滑走路建設に当たっていた。戦況は、それほどまでに緊迫していたのである。

夏休みに入る七月末に、滑走路の完成を待たず、やっと学寮である向陽寮に戻り授業が始まった。

突如襲ってきたソ連軍の怒涛の南下に、頼りに